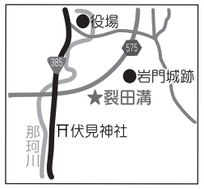
探訪 97

ながわ

那珂川町郷土史研究会



裂田溝24　伝七橋周辺

横枕堰の下流南側に「排水路-65」があります。次の「橋-20」との間にある寺山田側の田んぼへ入る水は、城山「岩門城跡」の麓にある平田池から取水されています。「橋-19」は南側の田んぼへ行く橋で、耕運機や田植え機などが通る農作業用の頑丈な橋に架け替わりました。「橋-20」は、小鳥ヶ丘地区ができたときに架けられた橋です。一の井堰を源に、裂田溝は悠久の歴史を刻みながら山田区の家並を抜け、寺山田地区へ入ると広大な田園風景の中へゆったりと流れ込みます。「橋-21伝七橋」まで来ると直角に曲がり、安徳方面へと向きを変えます。伝七橋は昔からあった橋で、名前の由来は小柳地区にお住まいの80歳代の女性によると『昔、この橋の向こう側に伝七さんという人が住んでいたからではないか』ということです。嫁いで来たときに、おじいさんから聞かれたそうです。

伝七橋を渡ったところは、城山「岩門城跡」の北側にあたり、小鳥ヶ丘になります。ここから城山の西麓に続く小道を南へ500m行ったところから、山頂へ向かって300mほど急坂を登ると「天狗岩」と呼ばれる巨岩があります。高さ11m、幅40m。周囲に大小の岩を従えて、急勾配にどっしりと構えて立っています。ここは昔、「光石」という石取り場でした。ここで切り出した石は橋の材料となり、山田区内の裂田溝に架けられた橋のうち3カ所に使われていたそうです。

城山の西麓にはツツジ園があります。ツツジ園の南側には「岩門城登山口」と記した案内標識が立っています。この標識は、那珂川町郷土史研究会が山頂までの登山ルートの案内として設置したものの一つです。

急勾配の登山ルートを8合目位まで登ったところに、「茶臼岩」と呼ばれる大岩があります。がけ下から見上げると、巨岩の上にテーブル状の大岩が腰を掛けるように乗っています。その大岩を揺らすと、以前は「コットン、コットン」と音がしていたそうですが、今は岩の間にかずらが巻き込んで音がしなくなっています。

さらに標識に沿って登山ルートを登ると一気に明るくなり、中央尾根の堀切に着きます。3本の堀切が残っていて、南側の尾根には3カ所の曲輪があります。北側の急坂を登った尾根筋には「曲輪・Ⅲ三の丸」、「曲輪・Ⅱ二の丸」、「曲輪・Ⅰ本丸」が続いています。

岩門城跡は、那珂川町教育委員会が平成14年から16年にかけて確認調査を行いました。岩盤をくり抜いた柱穴や堀、大規模な造成跡などが見つかり、たくさんの出土品が発見されています。土師器、青磁、白磁、とくに銭貨(古銭)、釘、碁石、火縄銃の玉など、15世紀から16世紀後半までの物が多く見つかりました。北側の一段低い「曲輪・Ⅳ」は本丸の北の端にあたり、東は立花山から若杉山、正面は博多湾、西は糸島半島など、素晴らしい眺望が開けています。岩門城は平安時代に大蔵氏(後の原田氏)によって築かれたと伝えられる山城で、1073年に完成したと言われています。鎌倉時代には元寇の際に活躍した少弐景資が居城し、兄の経資と戦った岩門合戦の舞台としても有名です。戦国時代には山口の大内氏が那珂郡代を設けるなど、支配者が代わりながらも長きに渡り使われており、この城がいかに重要であったかを物語っています。

次号は、石碇堰周辺を紹介します。

ぼんやりと月の光に照らされて
川面に集りしあい鴨一家
マサ子

コースメモ

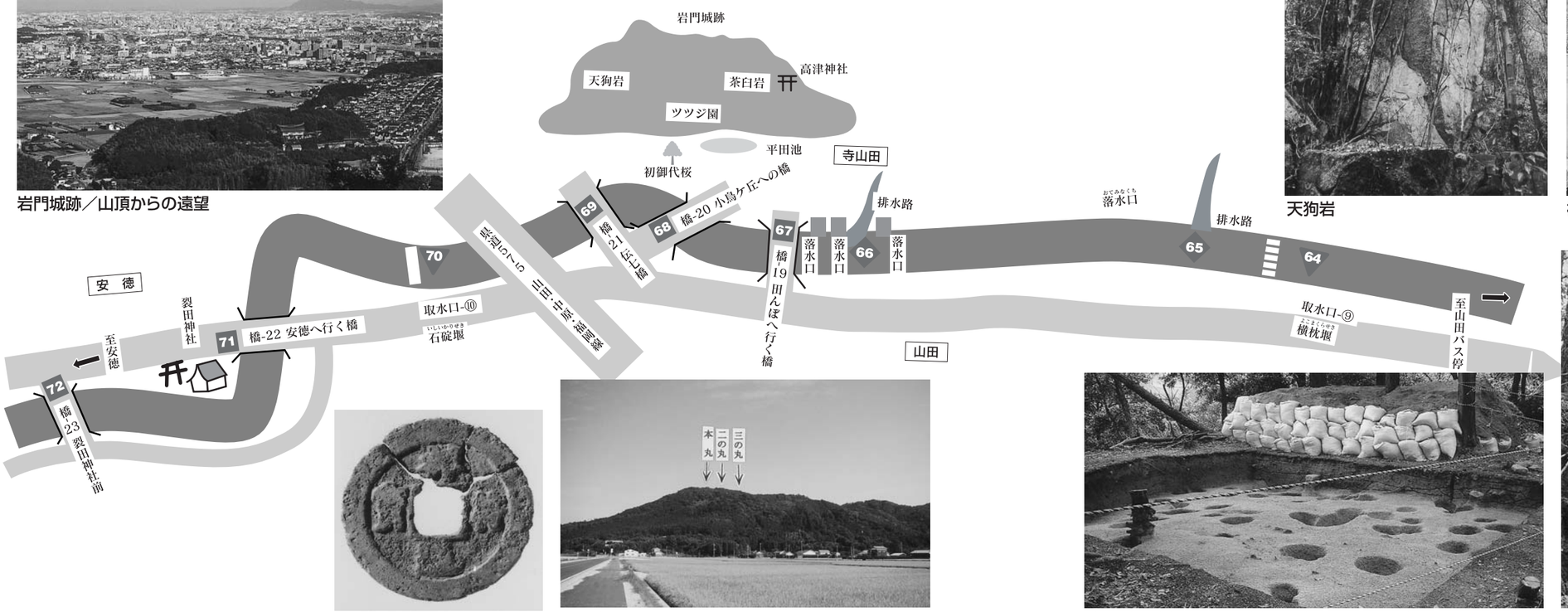
- 65. 排水路
- 66. 排水路
- 67. 橋－19（田んぼへ行く橋）
- 68. 橋－20（小鳥ヶ丘への橋）
- 69. 橋－21（伝七橋）

次号へ 取水口－⑩（石碇堰）

史跡メモ

- 岩門城跡
- 銭貨出土
- 柱　穴
- 茶臼岩
- 天狗岩

岩門城跡／山頂からの遠望



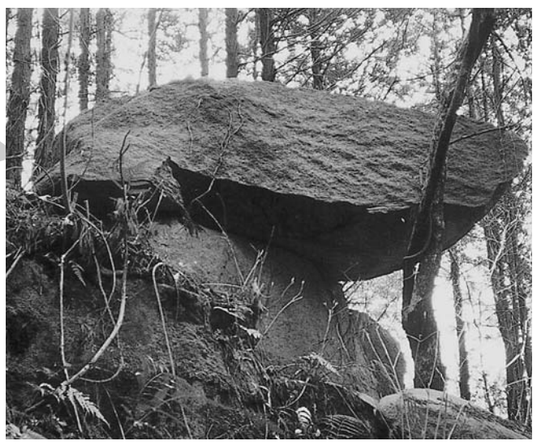
岩門城跡で出土した古銭

岩門城跡

天狗岩

橋－21伝七橋

岩門城跡（本丸跡の柱穴）／発掘調査時の写真


茶臼岩